

九州で金属加工の工場を営むM氏は、創業から七年たっても業績が振るわない中で、地元の倫理法人会に入会しました。そこで倫理法人会憲章の一節「共尊共生の精神」を目にすると「自分が求めていた経営の精神はこれだ！」と強く感じ、自社の経営理念の柱を、これまでの共存から「共尊」へ改めたのでした。

倫理法人会で学んだ挨拶や清掃を社内でも励行し始めると、大規模な受注が決まり、会社は深夜まで操業することが増えました。金属の加工を行なうため、稼働時にはどうしても音が生じます。以前は残業がなかったため問題になりませんでした。が、工場の周辺に住む住民から騒音に対する苦情が寄せられ、期日までに対策を講じるよう求められてしまいました。

しかし、製品の納期を守るには残業せざるを得ず、騒音対策を講じる余裕もありません。M氏は、倫理法人会の先輩にこの苦境を打ち明けると、次のようなアドバイスをされたのです。

「君は『共尊』を理念に掲げているが、近隣に住む方の生活を考えていなかった。無視していたのだ。まずは、挨拶から始めなさい。たとえ倒産することになっても、やるべきことはしなければいけない」

地域の方に挨拶すると決めたM氏は、それを幹部に伝えました。すると、「挨拶だけでなく、これまで社内で行なってきた清掃も地域に拡げてはどうでしょう」との意見が出て、さっそく全社員で開始しました。



経営理念に立ち返り 苦難を乗り越える

M氏は清掃しながらすれ違う人たちに挨拶をしますが、当初、その反応は冷たく感じられました。しかし、しばらく経ったある日、社員から地域清掃時の様子を聞くと、地域の方が、社員と気持ちよく挨拶を交わしているというのです。後日、M氏は苦情を訴えてきた住民宅に出向き、これまでのお詫びと、改善要求に対する期日延長のお願いをしました。

すると先方は、社員が明るく挨拶してはつらつと清掃している姿に感心して、M氏の会社を調べたことを告げました。そして「高品質の部品を製造して社会貢献している実績と、清掃時の社員の態度から御社を信用する」と、騒音対策を講じる期日について延長に応じてくれたのです。M氏は次のように振り返ります。

「純粹倫理では苦難には原因と意味があると学びますが、騒音問題と向き合うことは経営理念と向き合うことでもありました。

経営理念に『共尊』を掲げているにもかかわらず、私は近隣に住む方々の生活を思いやることができず、尊べませんでした。

経営理念に実際の行動が伴わなければ意味がありません。当時の苦難は、自身が掲げた『共尊』という理念の真の意味を教えるための、天与の激励だったのだと思います」

苦難と向き合うことを通して自身が掲げた「共尊」の精神を深く学んだというM氏。現在、その心を胸に刻んで事業に勤しむと共に、純粹倫理を学ぶ仲間の輪を広げることに励んでいます。